様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ１３２３１

研究課題名（和文）日本語母語話者による友人間の雑談における意見・考えのやりとりの研究

研究課題名（英文）A study of naturally occurring discussions in small talk between Japanese friends

研究代表者
高井　美穂（TAKAI, Miho）

大阪大学・日本語日本文化教育センター・准教授

研究者番号：５０７１１４８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：日本語の会話教育への応用を目指した基礎的研究として、日本語を母語とする大学生の親しい友人間における雑談の録音データをもとに、①意見に関するやりとりが行われやすい会話上の位置、②意見の述べ合いに用いられる連鎖組織（やりとりのパターン）、③価値観や意向・評価の不一致が露呈した際、会話がどこへ向かうのか、を分析した。分析の結果から、会話参加者らは雑談における意見のやりとりを通して、意見の異同にかかわらず、同じ成員であることを志向していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、雑談において自然発生的に起こる意見・考えのやりとりに関して日本語母語話者が持つ規範（期待）を明らかにした。フォーマルな話し合いに比べ、友人同士の雑談において自然発生的に開始される意見・考えのやりとりについてはまだ十分明らかになっていないことが多い。本研究で得られた成果は、日本語学習者に対する会話教育において雑談を扱うための基礎的な資料となるものであり、留学生と日本人学生との関係構築に寄与するものであると考える。

研究成果の概要（英文）：The present study is a fundamental research of small talk which aims to enable L2 Japanese learners to engage more actively in informal discussions with their friends. Focusing on the extracts from the audio-recordings of naturally occurring discussions between two Japanese students who are close friends, I analyzed (1) the sequential positions where exchanges of opinions are likely to occur, (2) some patterns of sequence organization used to express opinions, and (3) where conversations go when the participants face the difference of their future plans, evaluation toward someone/something, or sense of values. The analysis revealed that through the mutual exchange of ideas, the participants orient for being co-members of the same social group, regardless of the congruence of their thoughts.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育　会話教育　意見・考え　価値観　共-成員性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は日本語非母語話者を対象とする日本語教育への応用を目的とする雑談研究として位置づけられる。研究開始当初、日本語の会話教育において雑談を扱うことの重要性はすでに広く認識されつつあったものの、学習者向けの体系的な雑談の会話教材は刊行されておらず、さまざまな試行がなされている段階であった。雑談においてはゴシップや経験談の報告などさまざまな行為が行われる。本研究が対象とする、意見や考えを述べ合う行為もその一つである。フォーマルな話し合いにおける意見述べについては一定の研究の蓄積がある一方、友人同士の雑談において自然発生的に開始される意見・考えのやりとりについてはまだ十分明らかになっていないことが多く、フォーマルな話し合いにおける意見述べの方法をそのまま雑談における意見述べに応用できるともかぎらない。したがって、雑談でのやりとりを研究対象としてその特徴を明らかにすることが必要であると考え、研究を開始するに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、雑談において自然発生的に起こる意見・考えのやりとりに関して日本語母語話者が持つ規範(期待)を明らかにし、日本語の会話教育に応用可能な形で記述することである。こうした期待に関する知識は、日本語を第二言語として学ぶ学習者が日本語での雑談を通して周囲の人々との関係を構築していくうえで、重要な道標となるものと考えた。

３．研究の方法

本研究では、A) 進路や結婚といったライフプランに関わる価値観を述べ合う行為、B) モノや第三者についての評価を述べ合う行為、C) 会話参加者らが答えを有していない事柄についてともに考える行為、について、 (1) やりとりの開始を相互に理解可能にしている手立て、(2) 何者としての意見が期待されているか (例えば「女性としての意見」や「若者としての意見」など) を相互に理解可能にしている手立て、(3) 意見の不一致がどのようにして表明されているか、また意見の不一致が会話参加者らの間でどのように捉えられているか、(4) 話題がどのように終了に至っているか、を会話分析の手法によって分析した。

研究の手順は、大まかに述べると、(ｉ) 会話の録音データの収集、(ⅱ) 録音データの文字化 (トランスクリプトの作成)、(ⅲ) トランスクリプトの観察、(ⅳ) 分析結果の記述、の４段階からなる。分析に使用したデータは、日本語を母語とする 20～30 代の大学生及び大学院生の友人二者間の雑談を IC レコーダーによって 2008 年から 2009 年にかけて録音したもので、会話参加者は近畿地方をはじめとする西日本出身者である。当初、補完データを首都圏にて収集する計画であったが、新型コロナウイルスの感染拡大防止対策のため実施がかなわず、すでに保有するデータを用いて研究を遂行した。次に、音声データ及びその文字化資料から該当するやりとりを抽出し、会話分析の転記システムにしたがって詳細なトランスクリプトを作成した。さらに、音声を繰り返し聞きながら、各発話が相互行為上行っている行為のラベルをトランスクリプトに付した。そのうえで、まず (a) やりとりがどのような行為の連鎖からなるのか、構造を明らかにし、次に、(b) 異なる話者による異なる会話においても繰り返し観察される行為、語に注目し、それが相互行為上何を遂行しようとしているものなのか、何を指向したものであるのかを分析した。

４．研究成果

まず、友人間の雑談における意見・考えのやりとりに対して日本語母語話者が持つ規範として、「やりとりを開始しようとする者がまず自身の意見・考えを打ち明けるべきである」というものがあるという示唆が得られた。その根拠は次の二つである。一つ目は、収集したデータの中に、やりとりを開始する話者が自分の意見を明らかにしないまま相手に意見の提示を求める事例が見られなかったこと。二つ目は、やりとりのパターンは、開始発話の言語形式、及び二者のうちどちらがよりその話題について知っているものとされているか、という観点から、同意要求型、打ち明け型、意見伺い型、謎解きの誘い型の 4 つのタイプが抽出されたが、そのうち最も多かったのが打ち明け型であったことである。したがって、日本語母語話者の友人間の雑談では、一方の話者がまず自身の考えを打ち明け、相手にも考えの打ち明けを明示的に (同意要求型、意見伺い型)、あるいは暗示的に (打ち明け型、謎解きの誘い型) 促す、という方法が好まれるものと考えられる。

また、以上のことは、友人間の雑談における意見・考えのやりとりが何のために行われるのかということと関わっていることが示唆された。本研究ではとりわけ意見の不一致が見られた事例を分析対象として、不一致が露呈した直後に何が行われているのかを分析した。その結果、多くの事例において、会話参加者らが同じカテゴリーの担い手であること (例：就活生、女の子、熟練した読者であることなど) を志向したやりとりが行われていることが明らかになった。すなわち、日本語母語話者の友人間の雑談における意見・考えのやりとりは、(意見の異同はともかくとして) 仲間であり続けるために行われているということである。以上の成果は、『日本語・

日本文化研究』29 号、『日本語・日本文化』49 号、社会言語科学会第 44 回大会発表論文集、第 12 回 OPI 国際シンポジウムにて発表した。

なお、やりとりが生起しやすいのは①第三者についての語りの後、②ある対象に対する一致した評価が共有された後、③直前の話題との断絶を経た新たな大話題の冒頭であった。第三者についての語りの後の位置では、基本的に語りの語り手が「～と思った」などの形式を用いて打ち明ける。語り手を差し置いて語りの聞き手が開始する場合には、意見の打ち明けに先立って特別な手続きがなされていた。①の位置では打ち明け型が多く、②の位置では意見伺い型が見られた。③の位置では打ち明け型と謎解きの誘い型が見られた。

研究方法で述べた（1）～（4）についての結果の概略は以下の通りである。

(1) やりとりの開始を理解可能にしている手立て

A）進路や結婚といったライフプランに関わる価値観を述べ合う行為のうち、進路の意向をめぐるやりとりは、直前の話題から断絶を経た新たな大話題の冒頭（位置③）において、「てか／でもなんか【第三者（先輩や教員など目上の人物)】の話（を）聞いて」という形式によって、第三者の話を聞いて思ったことを打ち明ける形で開始されていた（打ち明け型)。ただし、直前の話題とまったく関連がないわけではなく、「就活」「英語」といった名詞から連想されたものとして関連付けられていた。また、結婚相手の年齢をめぐるやりとりでは、第三者の噂話の後（位置①）において、「【一人称】ほんと思うんだけど、（中略）【評価】ない？」（例：あたしほんま思うねんけどさ、（中略）年下の人と結婚したほうが合理的じゃない？）といった言語形式によって開始されていた（同意要求型)。

B）モノや第三者についての評価を述べ合う行為については、関連する別の評価対象について会話参加者間で一致した評価が共有された直後（位置②）に、「【評価対象】も【否定的評価】と思うんだけどどう思う？」(例:村上春樹もそんなに文章上手じゃないと思うんだけどどう思う？）という言語形式によって開始されていた（意見伺い型の「どう思う？」型)。評価対象は著名人など一般的に肯定的に評価されている人物で、開始発話の話し手が、相手の方に知識の多さを認め、詳しい人物としての意見（解説）を伺うような形でやりとりを開始していた。「【評価対象】さー、【否定的評価】ない？」という形式による開始も見られた（意見伺い型の否定疑問文型）が、スムーズに相手に理解されておらず、詳しい相手に解説を求めるやり方としてはやや弱いことが示唆された。

C）会話参加者らが答えを有していない事柄についてともに考える行為については、新たな話題の冒頭、あるいは冒頭に近い位置（位置③）において、「【評価対象】ってさ、【評価】ない？／【評価】よね。」（例：でも焼き肉屋で送迎ありって、ないよなあ。）という言語形式によって開始されていた。評価対象が、開始発話の話し手と聞き手のいずれかがよく知っている事柄でないとき、さらに開始発話が評価対象の特異性を際立たせるような方法で発話されているとき、その特異性の謎を推理し合う誘いとして理解されていた（謎解きの誘い型)。

(2)何者としての意見が期待されているかを相互に理解可能にしている手立て

分析したやりとりでは、ア）ジェンダー（例：女の子）や家族の成員（例：父親）といった、どのような集団にも適用できるタイプのカテゴリー、イ）所属コミュニティを構成する成員カテゴリー（例：〇〇大生)、ウ）消費にかかわる成員カテゴリー（例：読者）としての意見が述べられていた。第三者についての語りの後（位置①）においては、「直前の語りの登場人物をカテゴリー対またはカテゴリー集合の成員 X とカテゴリー化したなら、会話参加者らを Y と理解せよ」という規範にもとづいて、開始発話の意見が何者としてのものであるのか、また、聞き手に何者としての意見が期待されているのかが相互に理解可能になっていた。関連する別の評価対象について会話参加者間で一致した評価が共有された後（位置②）においては、先行するやりとりからカテゴリーの切り替えは行われていなかった。新たな大話題の冒頭(位置③)においては、断絶を経た直前のやりとりにおける何らかのキーワード（例：大学院）と、開始発話に含まれる動詞（例：進む）を結び付けて理解することが可能であった。あるカテゴリーと結び付けて用いることが適切な名詞と動詞の組み合わせがあり、それらを利用することで、当該の発話が何者としての意見であるのかを理解可能にし、さらに相手に何者としての意見を期待するのかを理解可能にしていると考えられる。

(3) 意見の不一致がどのようにして表明され、不一致が会話参加者間でどう捉えられているか

A)のうち進路の意向をめぐるやりとり（打ち明け型）では、2 人目の意向は短い言い切りの形（例：あたし先生なる。）で表明されていた。また、不一致の解消に向けた交渉などは見られず、開始発話の話者による説明要求と、2 人目の話者の説明が繰り返されていた。説明は悩み語りの形式がとられていた。2 人目の意向は悩みを感じさせない短い言い切りの形であったが、理由説明は逆に悩みがないわけではないという弁明にもなっており、意見の不一致よりむしろ 2 人目の話者が悩みを持たないことが問題となっていた。他方、結婚相手をめぐるやりとり（同意要求型）では、開始発話の話者と異なる 2 人目の価値観は「でも／けどやっぱり」を冒頭にともなう

発話によって示されていた。不一致が露呈した直後には、開始発話の話者が私事語りを開始し、対立するカテゴリーにある「男の子」を評価し合う行為へと移行していた。

B)のモノや第三者についての評価を述べ合う行為（意見伺い型（「どう思う？」型／否定疑問文型））では、不同意が短い評価語のみによって、淀みなく流暢に発話されていた（例：ぼく大好きだよ。）。より典型的な意見伺い型である「どう思う？」型は、一般的に肯定的に評価されている著名人が話題となっていたことから両者の意見は対等なものとは見なされておらず、肯定的評価が「われわれの評価・価値観」であるとされていた。したがって不一致が明らかになった際には開始発話の話者がその評価を持たないことが問題とされ、その理由探しが行われることになる。開始発話の話者が理由を述べられないことが観察可能である場合には、開始発話の聞き手が話し手の好みに関して蓄積してきた知識を用い、本人に代わって理由を推測して提示するという、会話参加者らの親しさに志向した行為が見られた。

C)の会話参加者らが答えを有していない事柄についてともに考える行為では、推測した理由は「答えを知らない者」として提示されていた。提示された理由の推測に対する不同意も「答えを知らない者」としてふるまうやり方で笑いをともなって産出され、「可笑しいもの」「笑うべきもの」であることが遡及的に示されていた。

(4) 話題がどのように終了に至っているか

A)においては、意見の不一致が見られた際、私事語りが行われる事例が多く観察された。私事語りにおいて行われていたことは、進路に関する話題（打ち明け型）では「就活生」につきものの悩み語り、結婚相手に関する話題（同意要求型）では「女の子」である会話参加者らと対関係にあるカテゴリー「男の子」に対する評価であった。これらの行為は、本節のはじめに述べたように、会話参加者らが意見の異同はともかく同じカテゴリーの担い手であり続けるためのやり方であると考えられる。私事語りはどれも長く続いており、続けるうちに話題が徐々に移行し対立が問題にならなくなった事例、現場の話題のように今ここで優先される話題が生じ、唐突に終えられた事例があった。同じカテゴリーの担い手であることが相互に確認されたなら、いつでも終わってよいし、続けてもよい、ということであろう。

B)は意見伺い型のやりとりであるが、その下位分類である２つのタイプのうちより典型的な「どう思う？」型においては、「われわれの評価」を持たない話者の否定的評価の理由を、会話参加者らがともに探す行為が観察された。小説家に対する評価の不一致が見られた事例では、理由をともに分析するという行為を通じて、先行するやりとりに登場する「一般的な読者」である共通の知人とは異なる「熟練した読者」であり続ける、つまり揺らぎかけた共通の成員性を維持しようとしていることが示唆された。その分析が行き詰まり、続けられなくなった際には、別のカテゴリーである「批評家」が持ち出され、会話参加者らは「一般的な読者」より知識と経験を有する「熟練した読者」ではあるが、専門家である「批評家」ではない者として、「わからない」ということが共有されて話題が終了していた。一方、もう一つの下位分類である否定疑問文型では、開始発話の話者が聞き手の意見（解説）に理解を示すことで話題が終了していた。

C)においては、両者は無責任にあれこれ推測し合って笑い合う行為を通して、「それについてよく知らず、かつ責任を負わない者同士」としてふるまっており、実際に納得したかどうかはともかく、開始発話の話者が「そっか」という形式によって理解を示すことでその話題が終了していた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 髙井美穂	４．巻 29
２．論文標題 日本語母語話者の価値観の共有における成員カテゴリーの利用と実践―ライフプランをめぐる女子大学生の雑談の会話分析から―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本語・日本文化研究	６．最初と最後の頁 86-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 髙井美穂	４．巻 49
２．論文標題 進路の選択をめぐる雑談における「悩める就活生」としてのカテゴリー付随活動―異なる道を選択する相手とのやりとりに注目して	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本語・日本文化	６．最初と最後の頁 19-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/87449	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 髙井美穂
２．発表標題 相互行為における親しさの主張―好みをめぐる友人間のやりとりから―
３．学会等名 第12回OPI国際シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 髙井美穂
２．発表標題 価値観をめぐるやりとりにおける成員カテゴリー化装置―日本語を母語とする大学生の雑談の分析から―
３．学会等名 社会言語科学会第44回大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関